
第二話

多田満仲誕生事

『前太平記』上 卷第一 二十頁から二十一頁より

そのころ、武蔵国守の橘敏有朝臣は娘を一人持っていた。深閨で大切に育てられ、年はもう十六歳である。容姿は、この上なく美しいだけでなく、性格はしと

容姿極めて端正なるのみに非ず、心操優にして、

やかで、秋の夜に琵琶を弾いて、沈みゆく光をいつくしみ、春の日には歌を詠ん

秋の夜に琵琶を弾じては、傾く影を惜しみ、春の日に歌を詠じては、

で、褪せていく花の色を悲しんだ。それゆえ、その心を聞き、その姿を見る人は、

移ろふ色を悲しめり。

気持ちを惑わせないということはなく、世間にまた他にいないと聞こえたのを、父の敏有はこっそりと経基王に（娘をもらってほしいとの）意中をほのめかしなされたのを、貞純親王がお求めになり、延喜十年婚姻に際するいでたちは厳かに問題なく、簾の中で嫁ぎなされた。夫婦で布団を何度か共にして、まもなく懐妊しなされた。

鴛鴦の衾重なり、程なく懐妊せさせ給ひしかば、

たので、西八条の宮に住まいを移し申し上げ、様々な御保養や御祈禱をそれぞれ行って、早くも臨月になったが、全くお生まれになる様子もない。貞純親王は大変驚きなさり、諸寺の貴僧や高僧にお命じになって、出産が無事上手くいくように、大法や秘法を行われる。中でも、延暦寺の御意向で送られた僧都は、長年の祈禱師をしていらっしやったので、八条宮にお招き申し上げられ、大床に護摩壇を構え、誠心を尽くしてお祈りになった。仏眼金輪五壇の法や、七仏薬師六観音烏芻沙摩變成男子の法を行って、護摩の煙は乱れて上に上って雲を作り、振鈴の音はさあっと

護摩の煙は擾々として雲を帯び、

振鈴の音は颯々として

風のように聞こえる。本当にどんな悪魔や怨霊であっても、妨げることはしづらい

風に聞こゆ。

と見えた。その他の色々なお社の幣帛を捧げ、色々な寺の守護に油断がなかったので、延喜十二年四月十日、御出産は無事に済まされて、男子が誕生したところ、祖父である貞純親王、父の経基王は申し上げる必要もなく、御殿中での喜びは、一族の人々は言うに及ばず、諸国の大名と、世間で対等程の者は、自分は他の者には劣るまいと、ずっと馬鞍・太刀・刀・鎧・腹巻・綾羅・金銀などを運ばせ、祝い申し上げられたところに、客人たちは御殿の内に群がり集まって、肥えた馬が門前に満ちていた。そう、成人の折になって、武勇の名将・和歌の名人、多田満仲になる人こそ、この若君のことである。右京太夫^(巻)致忠の奥方が乳母のために参上し

た。蓬の矢 (弐) の祝賀が行われ、鳴弦 (参) の役は滝口太夫 (肆) 安、加藤重光兵衛尉 (伍)、臼井藤太定員である。志摩国の次官は引目の役 (陸) を務める。翌日十一日、父母が揃う壮士を選び、岩清水八幡宮、下上賀茂などに、竜馬を七匹ずつ、差し上げられる。十二日、若君誕生三位のお祝いは匹田九郎がこの馬を準備する。十四日、五夜のお祝いは卜部次官がこれを務める。十六日の、七日目のお祝いは加藤重光が子供たちを伴い、白い水干袴を着て、簀子の上にお仕えして、貞正の母上が給仕を務め、嫡子の貞正・次男の貞時が兜を担ぎ、三男光貞・四男光国は馬を引く。五男の重貞は弓を持ち、六男の光季は剣を持ち、それぞれ庭に並ぶ。体裁はよく、よきを尽くし、美しきを尽くし、厳かであった壮観、まさに源家繁栄の吉兆であると、見事と言える次第である。

注釈

※壹・右京太夫……右京を管轄し、司法・行政・警察などを担当した役所の長官。

※弐・蓬の矢……蓬の葉を矢羽根とした矢。男子の誕生を祝う儀式に用いた。

※参・鳴弦……物の怪を払うために、矢をつがえずに弓の弦を引き鳴らす事。天皇の病気・入浴、貴人の出産のときなどに行った。

※肆・滝口太夫……蔵人所に属し、宮中の警備に当たった武士。

※伍・兵衛尉……兵衛府という内裏を守り、行幸などにお供した武官の役所の第三等官。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※

※陸・引き目の役……貴人の出産の時に、妖魔降伏のために、男児は三度、女児は二度、引き目（矢が音をだすための装置である鏑の種類の一つ）を射て、音をさせる役目。

当作品の柱刻である「源氏七代之武備」、一人目の源満仲の誕生です。安和の変で有名な人物で、「多田」という姓は、彼が現在の兵庫県川西市多田周辺を拠点としていたことに由来し、満仲から始まる清和源氏の系統を「多田源氏」と称しており、『前太平記』では多く多田満仲の名で登場します。ここから満仲がどのように活躍をしていくかは私もとても楽しみです。

この回で訳していて面白かったのは、やはりなんといっても橘俊有の娘の描写です。「心操優にして、秋の夜に琵琶を弾じては、傾く影を惜しみ、春の日に歌を詠じては、移ろふ色を悲しめり。」という箇所は、その表現の美しさに大変ドキドキしました。私の力不足でその美しさをうまく表現できなくて残念です。

綺麗な描写が多い回ですので、訳をしていてとても楽しかったです。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2015/5/23

改訂：2021/3

海熊童子

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※